

日本文芸論叢 第十二号 別刷
平成十年三月

島木健作『癩』『盲目』と亀井勝一郎の初期評論

山崎義光

島木健作『癩』『盲目』と亀井勝一郎の初期評論

山崎義光

本稿では、島木健作の初期の小説『癩』(昭9・4)と『盲目』(昭9・7)が、「転向」をめぐる懊悩する人間を形象化することを通して、「転向」問題をいかに論理化しているかを言説・形象に即して論じてみたい。「転向小説」の概念については諸説があるのであらかじめ本稿での理解の仕方を示しておきたい。安藤¹⁾は、権力によって強制されたゆえの思想の変化という意味での「転向」の定義をそのまま「転向小説」を理解する枠組みとする考え方を廃し、むしろ初期の「転向小説」が「転向」を主題としながら「転向」自体は描いていないという点にこそ着目して考察している。とくに島木の『癩』『盲目』については、「最後まで読んで、主人公が転向したのかどうかさえ読者には解らぬ始末である」と述べている。安藤の見解を受けながら、本稿では、「転向」については、転向者の書いた文学であるとか、転向してしまった者を描いた作品のみを指しているのではなく、転向するかしないかをめぐる問題を形象化した小説という程度の意味に解しておきたい。したがって、完全には「転向」と切り離して考えることはできない。転向を迫られた主人公を形象化した島木の『癩』『盲目』は、直に転向してしまっ

た姿を描いてはいないにせよ、そこには転向をめぐる苦悶の形象化を通じて潜在的に転向の契機となる自意識の論理化が現れてくるからである。安藤の指摘を受けながらも、以下では、自意識がいかに露出していくか、またそれがどのような論理となっていくかを、形象化の様相をたどりながら検討し、いかなる意味において転向を準備する論理となっていくのかを論じていきたい。形象化の様相をそのまま論理として解していく、という意味において本稿ではレトリックの分析という方法をとることになる。

そして他方、転向とともに自意識・ロマン主義等が提起された昭和十年前後において発表された亀井勝一郎の初期評論と突き合わせながら、両者の小説・評論に通底する論理(レトリック)がいかなるものであったかについて考察してみたい。島木と亀井との関係については、すでに、平野謙が、両者はシェストフ現象とナルブ解体の衝撃を直接間接に経ているとし、次のように指摘している。すなわち、亀井は「ここ」[引用者注―「生けるユダ」]からゲエテに赴き、仏陀に赴く。亀井勝一郎におけるいわば第二の転向がここにはじまるのである。「癩」に出发した島木健作が「再建」(昭和十二年

六月・中央公論社刊)にまでのぼりつめ、そこから「生活の探求」(同年十月・河出書房刊)へと急カーブをえがいて下降してゆくコースと、それはほぼ見合っている。しかし、平野の指摘には、いかなる意味において両者が「見合っ」た「コース」を辿ることになったかについての考察はなされていない。本稿では、主として昭和九年の島木の小説と亀井の評論に注目しながら、両者の同型的なレトリックに着目しつつ考察していくことにしたい。

一 『癩』

『癩』は、昭和九年四月『文学評論』に発表され、小説集『獄』(昭9・10ナウカ社刊)に収められた島木健作の最初の小説である。中村光夫は、「『癩』に小説的統一を与へてゐるのは太田といふ男の肉体である」と指摘し、また三島由紀夫は、この小説を「肉体と思想の相剋のドラマ」であると指摘した。たしかに監禁された囚人たちのあるいは病者の形象によつて主人公の置かれた状況の苛酷さが呈示されており、その意味で「肉体」の形象がいわばテクストの横糸となつているといえよう。だがそのような理解のみでは、プロットの展開に即した、いわばテクストの縦糸となる「相剋」の様相が見逃されてしまう。以下で述べるように、このテクストのプロット展開は、〈聞く〉ことと〈見る〉ことの喩によつてなされているように思われるのである。また、中村光夫は、当時の島木の発言にあった意図と作品『癩』の表現との間に乖離があるとし、作品には「思想」が書かれていないと批判した。だが、テクストに即して読む限り、思想犯太田の「不安と動揺」は、自らの主義の堅持か転向

かという意味での「思想」の問題の次元ではなく、そもそも「思想」の問題の次元を可能にしている条件である「肉体」の崩壊にあつて、三島由紀夫が「マルキシズムは何かより高次の異質の信仰に変貌したのである」と指摘し、「実存主義的作品」と呼んだように、政治的「思想」の次元を越えたところで、あるいはさらに言えば、思想的「肉体」という区別を包括したところでこそ転向の問題が把握されていたといえる。プロットの展開に即して考えることは、そのような意味での転向問題の把握方を考察することにもなる。

思想犯の太田は、「瀬戸内海に面したある小都市の刑務所」(3)から新しく移された刑務所の独房に収監されると、自らの身体を中心とした「音の世界を楽しむ」(5)み、また「同志たちの声」を「唯一の力とも慰めとも」(6)感じるようになる。

ほぼ一月もするうちに、単調なこの世界の生活の中にあつて、太田は、いつしか音の世界を楽しむことを知るやうになつた。彼の住む二階の六十五房は長い廊下のほぼ中央にあつてゐた。この建物の全体の構造から来るのであらうか、この建物の一廊に起こるすべての物音は自然に中央に向つて集まるやうに感ぜられるのであつた。その内部が幾つにも切られた、巨大な一つの箱のやうな感じのするこの建物の一隅に物音が起こると、それは四辺の壁にあつて無気味にも思はれる反響をおこし、建物の中央部にその音は流れて、やがて消えて行くのである。(5)

発病以前の太田は、刑務所の「長い廊下のほぼ中央」に収監され

ており、そこでは「建物の一廊に起こるすべての物音は自然に中央に向つて集まるやうに感ぜられる」のである。W—J・オングは、「視覚は、一どきに一方からしか人間にやって来ない。つまり、部屋を見たり風景を見たりするためには、眼をあちこちに動かさなければならぬ。ところが、聞くときには、同時にそして瞬時に、あらゆる方向から音が集まってくる。つまり、わたしは、自分の聴覚の世界の中心にいる。その世界はわたしを取りかこみ、わたしは、感覚と存在の一種の核の位置にいる」と聴覚の特性を指摘している。太田は階の「中央」にいろのみならず、自らを「中心」とする「音の世界」(5)において刑務所内世界での身体的境位を保っている。しかも、「同志たちの声」が「朝晩の二回」(6)とどき、それは「鬱結し、鬱結して今は堪えがなくなつたものが、一つのはけ口を見出して逆しり出づるそれは声なのであ」(7)り、「朝夕の二度はかうして脈々たる感情がこの箱のやうな建物のあらゆる隅々に波うち、それが一つになつてふくれ上つた」と語られる。「同志たちの声」の響く「音の世界」とは、それがとくに「音」であることによつて「感覚と存在の一種の核の位置」に太田の身体を位置づけることもに、その「音の世界」に「同志たちの声」が含まれることによつて、獄外の世界での「同志たち」との連帯意識を、投獄されてなお維持させるものであるかのごとくである。

ところがその後、太田は発病し、「物音一つしない」(11)隔離病棟へ移されることになる。これは、それまでの「音の世界」、「同志たちの声」による連帯意識からの切断をも意味しよう。しかも、移された場所は「社会から隔離され忘れられてゐる牢獄のなかにあつ

て、更に隔離され全く忘れ去られてゐる世界」(14)なのである。そうして太田は、同じ隔離病棟の癩病患者を「注目して見る様にな」(18)る。同病者の死、癩患者らの旺盛な「生活力」を目のあたりにし、自らの体も病に弱つていくにつれて、その「冷酷な現実の重症に打ちひしがれて了」(29)う。すなわち「癩病患者および肺病患者のなかにあつて、彼等の日常生活をまざまざと眼の前に見、自分も亦同じ患者の一人としてそこに生活しつゝある間に」(28)29)、共産主義者としての「理論の理論としての正しさには従来どほりの確信をながらも、しかもその理論どほりには動いて行けない自分、鋭くさういふ自分自身を自覚しながらもしかも結局どうにもならない自分」(29)を感じ、「太田の心のなかに漠然と生じ来つた不安と動揺」(28)に悩まされるのである。太田にとつて「共産主義者の持つ大きな任務」とは、「盲目的な意志を貫ぬかうとして荒れ狂ふ現実を、人間の打ち立てた一定の法則の下にしつかと組み伏せやうとする」(29)ことであるから、その規範に照らして、「理論どほりには動いて行けない自分」とのずれが「不安と動揺」をもたらしているのである。

このような「不安と動揺」の渦中にあるとき登場する岡田と太田との関係は、太田が岡田の姿を〈見る〉という関係において特徴づけられている。はじめに「遠くの監房の扉を開く音が聞こえ」(31)、それが「新人」が房に入れられる「音」であることを隣の房の村井から知らされるが、その後太田は「待ちかねて興味に眼を輝かせながらその新入の患者の姿を見たのである」(32)。すなわち、太田の岡田との関係は、はじめ物音を〈聞く〉ことからその存在を漠然と

知るのであるが、〈見る〉ことへと興味の寄せ方を変移させていくのである。「その男の姿をちらりと垣間見た瞬間に、彼はおもはずハッと思」うが、最初は「廊下のガラス戸が日光に光つてよくは見えない」。しばらく待ってのち「その新入の男の姿を眼に捕へた瞬間に太田はわれ知らず、おやつと思」う(32)。そして、「その日から異常な注意をもってその男の一挙一動を観察するやうにな」る。というのも「その男の顔に見おほえがあつた」(32)からである。太田は男のことが気にかかるのだが、その場合にも、「真夜かなかに彼はまたふつと眼をさますことがあつた。目ざめてうす暗い電気的光りが眼に入る瞬間にはつと何事かに思ひ当つた心持がする」(33)。その後ようやく、村井が手紙から岡田良造の名を知って、太田にその名を告げると、太田は「強い打撃を後頭部に受けた時のやうに目の前がくらくらし」、「それから寝台の上に横になつて、いつも見慣れてゐる壁のしみを見つめてゐるうちに、漸く心の落着いて行くのを感じ」(37)る。

ここで、実は、岡田はかつて太田の部屋に居候していたことがあり、そのときも「別に話をするでもなく、暮した」ことが語られる。当時太田は朝早く家を出、遅くなつて帰る日が多いのでしじみみ話をする機会もなかつた(38)のであつた。そうして、いつの間にか岡田はどこかへいなくなつたのだが、その後太田が「上部機関」に対して「指導を仰いだ」手紙の、その「返書の直接の筆者が岡田良造であつた」(39)ことを投獄されてから知つたのだつた。ここで注目したいのは、太田と岡田の関係には、初めの出会いから、ある隔たり、〈距離〉がはらまれていたことである。

れた「現実」を「平然」と「組み伏せ」た、思想を体現する姿に、太田は尊敬を寄せるのである。

初めて太田が岡田と話をするとき、建物の「上と下で二人の視線がカツチリと出会つた時、妙に表情の硬ばるのを意識しながら、太田は強いて笑顔を作つた」(42)。この場合の太田から見た二人の位置——「上」にいる岡田と「下」にいる太田——は、思想を堅持する信念の強度に対応する。そして、二人の間にはやはり「視線」の〈距離〉がある。太田の「視線」には向こうとこちらという〈距離〉とともに、向こうを理想としてこちらをその下位へ位置づけるといふ、向こうを準位とした遠心化がはらまれる。このようにして、こちらの「下」にいる太田の、向こうの「上」にいる岡田への「畏敬し、羨望」(51)する「視線」が、「視線」にはらまれる〈距離〉を含意して形象化されている。竹松良明は、「岡田は太田によって畏敬、羨望され仰ぎ見られる願望の対象としてのみ存在」するのであり、「岡田あつての太田ではなく、どこまでも太田あつての岡田の造形である」と指摘したが、この指摘が首肯されるのは、なによりも、述べたような太田の身体—視線の〈距離〉と遠心化をはらんだ形象化によるのだといえよう。「太田は岡田を畏敬し、羨望した。しかしさうかといつて、彼自身は岡田のやうな心の状態には至り得なかつた。岡田の世界は太田にとつてはつひに願望の世界たるに止まつたのである。——そこにも彼は又寂しい諦めを感じた」(51)。テキストは、重症となり、死を予感させながら病舎から出される太田が「自分の今までのた方角をぢつと見やつた時に、彼方の病室の窓の鉄格子につかまつて、半ば伸び上りかげんに自分を見

そして、そのようなかつての岡田との〈距離〉は、刑務所での岡田との邂逅が〈見る〉ことにおいて特徴づけられていたことについてもいえよう。「視覚においては、見ている者が、見ている対象の外側に、そして、その対象から離れたところに位置づけられる」からである。

ところで、隔離病棟においては、役人・看守の扱ひもひどいが「健康な他の囚人達のこゝの病人に対するさげすみは、役人のそれに輪をかけてものであつた」(16)ことが語られている。とともに、癩病の囚人と肺病の囚人も対照されており、太田の「不安と動揺」は肺病による死の恐怖とともに、それよりもっと目に見えて病状が現れる癩病患者の姿を見ることによつて強められている。太田は「身体がもう半ば腐つて居」る癩病人たちの「生活力の壯んな」様子に対して、その「人間の動物的な、盲目的な生の衝動の強さに打たれ、やがてはそれを憎み、——生きるといふことの浅ましさに戦慄」するのである(30)。隔離病棟の内部には、いわば役人・看守／囚人の、監視／被監視の権力関係に加えて、健康な囚人／肺病者／癩病患者という、いわば「健康」の序列³⁾があるといえよう。癩病患者の岡田の存在が際立つたのは、岡田が「こゝの世界には不似合な平然たる顔つき」(34)をしていたからであるとされる。それをいにかえれば、権力関係から、そして「健康」の序列からも超脱した風をしていたからであるといえよう。岡田は、「盲目的な意志を貫ぬかうとして荒れ狂ふ現実を、人間の打ち立てた一定の法則の下にしつかと組み伏せ」(29)ることこそが思想の意義だと考える太田の理想とする姿そのものであつたのである。このような、病に犯さ

送つてゐる岡田良造の、今はもう肉のたるんだ下ぶくれの顔を見たやうに思つたのであるが、やがて彼の意識は次第に痺れて行き、そのまゝ深い昏睡のなかに落ちこんで了つたのである。……」(52)と終っている。岡田の生き方があるべき理想として「畏敬し、羨望」するが、岡田と同じ境位には立てないまま、〈身体〉の崩壊によつて幕が下りるのである。太田の「諦め」とは、太田が岡田を〈見る〉〈距離〉をついに縮められない事態をいうものだといえよう。ここにおいて注目しておきたいのは、太田の理想が外在する他者としての岡田に見いだされている点である。次には「盲目」を取り上げて『癩』の場合と同様の視点から考察するが、その後で、この点について特に比較してみたい。

二 『盲目』

『盲目』は、昭和九年七月『中央公論』臨時増刊号に発表され、同じく『獄』に収められた。

テキストの構成は、始めに、既に失明した古賀が登場し、その彼に佐藤弁護士が面会にくるところから始まる。佐藤に「あなたの今の気持ですね、つまり心境といふやつです。」「中略」それをお聞きしておきたいんです」(61)と尋ねられた古賀の、それに対する返答を決めるに至るまでの、捕らえられ、失明し、煩悶した「過去の追憶」(63)を挟んで、十日ほど後に、「一審のときと格別かはりのないものとして万事よろしくおねがひいたします」(91)と返答し、自らの「心境」(非転向の意思)を決定するに至るまでが語られる額縁構造をなしている。

古賀は、失明の後、見ることの不可能を実感することから「発狂の恐怖」(72)に襲われ、「単に生理的に見ただけでも、五官中の最も大きな一つが失はれたために、感覚をまとめる中心が戸まどひをしてゐる形で、思考も分裂してまとまりがつかず、精神状態は平行為失つてゐた」(73)。古賀は「死」を考へるようになるが、しかし「聴覚の修練」によつて「落着き」をとりもどすのである。

この真暗な心の状態から古賀がすくはれ、やがて次第に落着きを取りもどして行つた、その契機ともなつたところのものは、聴覚の修練といふことであつた。「中略」古賀は、心を聴覚の修練にもつばらにすることによつて精神の統一をものはからうと努力しはじめたのであつた。さうしてその試みは成功したといへる。この建物の内部に自然にかもし出される、単調ななかにもあらゆる複雑な色合ひを持つた音の世界に深く心をひそめることによつて彼は次第に沈んだ落着きを取り戻してゆき、その後の古賀にとつては外界とは音の世界の異名にすぎないものとなつたのである。(74)

ここでは、古賀が「盲目」の〈闇〉のなかで「聴覚の修練」により、「音の世界」において「精神の統一」を回復したことが語られている。視覚に対して、聴覚は、この身体を中心にして世界を統合する(W・J・オング)と言ひるのであれば、古賀は、外部的な視覚の対象を中心とした精神の統一から、知覚の帰属点としての自らの身体を中心とした精神の統一へと移行してゐたのだといえよう。そして、このような身体的な境位に「落着きを取り戻してゆ

くのだが、しかし「心が狂ふであらう、といふ眉に火のつくやうなさしたつての苦悩がそのやうにしてやうすりいでみると、こんどはしかし、心に余裕がなかつたために今までかへりみずゐるたひとつての苦悶があたりしくはつきりと浮きあがつて来るのであつた」(76)。こうして自らの主義の維持をめぐる動揺が、今度は〈光〉の喩で語られるようになる。

「今までは、どんな場合にもつねに一つの焦点を失つてはゐなかつた。内から外から彼を通過するあらゆるものはみんなその焦点で整理され統一された。今はさういふものがなくなつてゐる」「中略」古賀はよるべのない捨小舟のやうな自分自身を感じた」(77)。「暗のなかに一筋の光を見るだけの気力」、すなわち「従来、自分の立つてゐた立場にひとまづ帰り、そこから筋道を立ててものごとを考へてみるだけの心の余裕をとりかへしては」おらず、「暗中摸索」の時が必要とされた」(77)のである。「暗のなかに一筋の光を見るだけの気力」がなく、また「暗中摸索の時」であつたとは、そのまま「盲目」となつた身体に相即している。すなわち、「盲目」となることが、そのまま〈光〉＝主義を維持することへの揺らぎとなつてゐるのである。「盲目」とは、主義を維持することへの懐疑の原因であるという意味で太田の身の去就の換喩であるとともに、揺れ動く心境の隠喩でもあるのである。

そして、古賀がとりあえず落ち着いたのは、「一つのあきらめの世界」、すなわち「捨小舟が流れのまゝに身を任せてゐるやうにすべてを自然のまゝに任せきり、いづこへか自分を引ずつてゆく力に強ひて逆らうとはせずそのまま従ふといふ態度」(77)であつた。

だが、それは「一時の腰かけに過ぎないといふ気持を絶えず持つてゐた」(78)。いまだ「昔彼の立つてゐた立場」を信する気持があつたからである。「公判廷においてどういふ態度をとるべきか」をめぐつて、古賀は、かつて「内から外から彼を通過するあらゆるもの」を統一していた「焦点」、すなわち「昔彼が立つてゐた立場」「自分が今まで抱いてゐた思想」を基本的には信じながらも、「明かにわかつてゐることを踏み行へないところ」で「懊惱」(78)する。そして、古賀は「決定的な態度」を決めかねたまま、あるいは「きめておいても最後の場合、どうなるかも知れはしないといふ不安」をもつたまま「公判廷」にのぞむ(80)ことになる。だが、「一度思ひが年老いた彼の母の身の上を走るとき、その不安がますます大きなものになつて行く」(80)。また妻とは離別し孤立は更に深まる。

最初の公判で「依然従来の思想的立場に立つものである」(87)と答えた「一審の公判を終へてから今日まで十カ月、その間彼は幾度も弱り又元氣を取り戻した。元氣をとりもどし、あたゝかい血潮の流れを身裡に感じ、萎縮し切つてゐた胸がまるくふくらんでくる思ひがすると古賀は記憶のなから幾つかの歌をとり出しては口ずさんだりするのであつた。それらの歌はみんな彼の過去の闘争の生活と結びついてゐた。若々しく興奮し、心持ふるへる押し殺したこゝろで暗闇のなかで古賀はそれをうたふのだ。だがやがて彼はまたちり／＼と弱つてゆき、かぢかんだ心になるのであつた」(89)。「一定の時期さうした状態がつかず、その次に来たその当時のやうな虚脱状態はどうにも仕様がなかつた。するするとほとんど不可抗的な力でニヒルな気持にひきずられて行つた」(90)。だがしだいに「さ

うした場合に処する心の持ち方をも自ら体得」するようになり、「その暗さのなかに没入して時を待つ」ようにすると、「やがては心の一角にはのほの明り光がさしてくるのであつた」(90)。そして、ついに「明り光をみることの方が多く」(90)なる。

こうして古賀が公判の前に至りつゝいた心境は、「街路をあるいてゐる人間のとりどりの顔つきや姿態などをひとりりはなれてこつちから見てゐると、なんとはなしにをかしくなつて吹き出したくなる」ように、「自分自身の惨めな姿をも、一定の間隔を置いてそんなふうにして笑つてみるだけの心の余裕を持ちたい」(90・91)というものであつた。

このように、最終的に非転向の心境を返答する段階で、「暗さ」のなかに「明り光」をみるようになつたとされ、自らを対象化した「一定の間隔を置いて」〈見る〉と語られるにいたつて、『癩』におけるやうな視覚的〈距離〉の喩が回帰してくるかのようである。しかしながら、この場合は、自分で自分を見るという自己の二重化においてである。

自分自身のなかで、自身に対して「一定の間隔を置いて」、「死の一步手前にあつてなほも夢想し、計画し、生きる希望を失はない男。古賀はそんな男を自分の頭のなかにえがいてゐる」(91)とは、自己のあるべき姿を「盲目」の古賀自身が「見る」ということである。この隠喩は、いわば『盲目』の視力」の獲得であるといえようが、それは以上で述べてきたことから言えば、古賀は、『癩』における太田の岡田との〈距離〉を内面化してゐるのだと捉えられよう。

小笠原克は、「盲目」の古賀は、『癩』の岡田と太田との絶望的

な距離を設定した作者が、逆に能うかぎり太田に岡田を希求させたところに誕生した観念的人物なのだと考えるのである。島木にしる太田にしる、可能な限りの非転向者像の内面的位相如何、とみずからに問うたとき、彼等も同様味わった「明暗のくりかへし」を「明」の位相に収斂させた一徴表として、古賀は誕生したのである。「中略」に在るべき非転向自我像と、自己の内部で葛藤を演ずる古賀は、實在の非転向者岡田を仰ぎ見る太田と比べれば、その内面的位相は五十歩百歩なのだ」と述べた。また、小野寺凡は、古賀を「岡田と太田の中間に位置する人物」と評した。小笠原が指摘するように「非転向自我像」に照らして自身を顧みるという点においては『頼』の太田と『盲目』の古賀とは共通しているが、しかし両者を「五十歩百歩」「中間に位置する」といった同一次元で評価すべきではない、以下で述べるような構造的な違いがあるというべきであろう。この点については、後で論じたい。

三 亀井勝一郎の初期評論

亀井勝一郎は、プロレタリア作家同盟の活動に関する自他への批判を含めて発表した「故郷へ帰れ」（昭8・11『人物評論』）において、「若干の政治理論でもって自己の風貌を糊塗」することを諷めながら、「英雄の仮面」、いわば理論的建前主義を排すべきだと主張した。そして、「僕等は自分の肉体の故郷へ一旦帰るべきだ。長い将来のことを考へて、そこで自分の政治的力と文学的素質についてよくよく熟慮してみたい。堪へうる力を評価してみたい」と述べる。ここで「自分の肉体の故郷」と言われているものは、後

に「自我」とよばれるものの萌芽であるといえよう。そして、それが「故郷」の隠喩で呼ばれているのは、指導的理論という「英雄の仮面」から一旦離れて、そもそもの政治闘争の原点としての自身（「自己」の風貌）「自分の肉体の故郷」に帰ることであるという意味においてである。

亀井の「自分の肉体の故郷へ帰れ」という主張は、島木の小説『盲目』において、古賀が失明から、「あきらめの世界」にとどまりつつ、自分の失明した肉体へ帰ったところで苦悶する姿に対応するといえよう。亀井が、古賀の「あきらめ」に注目し、また島木の初期の諸作品中とくに『盲目』を評価しているのも、党運動と自己との関係の取り方についての亀井自身の見解と、その構図において通底していたからであつただらうと思われる。亀井は、ちょうど『頼』と『盲目』の間に発表していた、プロレタリア詩人に向けて書いた評論「光りは闇の中に輝く」（昭9・5『詩精神』）において、「意志、つよい意志は闇のなかでのみかたまる。私は、我々のいまおかれてある敗退の内面的心理を闇だと思ひ、そこにまづ身を委ねようといふのである。」「中略」そして「我々の未来といふものを高らかに歌ひうるとすれば、その未来、その光りはこの闇の中にのみ輝く」と論じている。これに端的に示されているように、『盲目』の視力」と通底する認識の型が、亀井にとっていかに親近的な状況認識の型であつたかがうかがわれよう。述べたように、小説『盲目』の終幕において古賀は、「己の「暗いかげ」に覆われた「空虚さ」(「虚脱状態」「ニヒルな気持」)、「自分の運命の暗さ」(91)に耐え、「盲目」の視力」によって「明るい光」を見るのであつた。この場合の

「盲目」の「暗闇」のなかの「空虚さ」「虚脱状態」とは、『盲目』の視力」が、見ることの不可能性において見るという背理を含意していることに対応しているといえよう。そして、この隠喩的構図が含意しているのは、端的には、亀井が「能動的主体の自意識」と呼んだ、主体性の問題である。

亀井は「故郷へ帰れ」での主張を、さらに『転形期の文学』の諸評論と「生けるユダ(シエストフ論)一・二」において展開していくことになる。その骨子となる「転形期の自我」(昭9・3『文化集団』)での「能動的主体の自意識」という主張は、桂秀実がヘーゲルの主と奴の自己意識論になぞらえて述べたように、まずは「自己意識の覚醒」(5)として理解しうるものである。『転形期の文学』に取められた「芸術的気質としての政治慾」では次のように述べている。

すぐれた芸術家にとつて、政治とはいかなる場合にあつても外部強制ではなく、まして命令でもなく、束縛でもない。それは単に彼の自発的な意志であつたのだ。政治への受動性を示した作家のみがあらはれむべき御用文学をつくつたことは、既に、この国の左翼文学が僕らにのこしたにがい教訓のひとつである。所謂政治主義とは、党派への盲目的追従に由来する非政治主義の逆説的なあらはれであらう。

同書に収められた「文学における意志的情熱 三 政治と文学」においても、それまでのマルクス主義文学の活動を振り返って、「指導的理論」に先導された政治活動が硬直化し、同語反復的となつて活力を失つたとして、「今日、私はまづ「指導的理論」をのべよう

とする態度そのものを拒否しよう。大衆にものを教へる。作家にものを教へる。この教へこもうとする教師的態度に、私は判然と対処せざるを得ぬ」と主張する。すなわち、「指導的理論」の強制と、「党派への盲目的追従」によつて個人の主体性・自律性がかき消された「政治主義」に陥つたとし、それに対して真の「政治」を対置するのである。ここでいわれている「政治」とは、「指導的理論」を第一義的であると捉えてきたこれまでの運動を相対化し、それを批判・否定する、真の「理想」を憧憬することの謂である。

また、同書の「政治と文学について」では、「政治は社会的な党派の問題であるだけに、文学者がそこに払う犠牲もまた大きい。僕らにとつての関心は、リアリストたちがあへて政治に身を近づけながら、どこで、いかにして政治から離脱するかといふ一点である。」と述べている。

政治と文学の関係を論じるなかで、亀井が提示する「能動的主体の自意識」なるものをまとめると、次のようにいえるだろう。すなわち、マルキシズム自体が、現行の秩序の変革を志すことであつたが、しかしその場合の変革しようとする主体は「党派」であつた。だが、「党派」は「指導的理論」への盲従を強いるようになった。そこで今度は「党派」に対する「自我」の「政治」が要請される。こうして、現行の秩序に対する「党派」の「政治」が要請される。「党派」と「自我」との関係にも見出され、そこで「政治から離脱する」こと、すなわち「政治主義」から離脱することを説いたのだといえよう。「政治と文学について」は次のような言葉で締めくくられている。

芸術的気質としての政治慾とは、政治への憧憬に始つて政治からの逃亡に終る、その繰り返される循環線であらう。その上をさま迷ふことがどうにも出来ない良心の宿命なのだ。今後も屢々現実が夢想をうち砕くであらう。しかし夢想は未来において現実に復讐することを忘れないだらう。

「政治への憧憬」（「夢想」）が、「党派」によって現実化へ向かうとき「政治主義」に陥る（「現実が夢想をうち砕く」）。したがって、そのような「政治主義」からは離れなければならない（「政治からの逃亡」）。そして、それが「くり返される循環線」こそが「芸術的気質としての政治慾」だというわけである。

「政治からの逃亡」とは、理想の憧憬としての「政治」が「政治主義」へ陥ることから逃れることであるとともに、他方「理想」＝「夢想」が「未来において現実に復讐すること」を目指したものである。亀井はその後日本浪曼派へ合流していくが、それは、自（己）意識の運動によるマルクス主義文学運動への批判（ひいては転向）が、亀井において、「政治」が理想の憧憬であるという意味からそのままロマン主義の主張になっているからである。そして、「政治主義」への否定の働きである理想の憧憬としての「政治」の核が、「自我」と呼ばれているのである。「自我は、社会的激動の只中における能動的主体の自意識としてあらたに問題にされねばならぬ」（「転形期の自我」というのはそのような意味において主張されている）。

『転形期の文学』巻頭のエッセイ「転形期の自我」で、すでに「社会性」についての見解を本稿の文脈において必要な点で参照しておきたい。

大澤によれば、「個人における〈主体性Ⅱ主観性 subjectivity〉」こそは、われわれの社会を、つまり近代性 modernity ということを定義する条件である。〈主体性Ⅱ主観性〉を定義する要件は、選択の超越論的水準と内在的水準の二つの選択の水準がともに個人に帰属しているかのように事態が現象していることである。超越論的水準とは、経験の可能性の集合を、すなわち経験の地平、行為の規範を規定し限定する働きの水準であり、そのような超越的な選択の作用を担う契機を大澤は「第三者の審級」と呼んでいる。そして、内在的水準は、超越論的水準において開かれた経験可能領域でその可能性の内から選択し実現していく水準である。以上を時間性に即して言えば、未来の目標を設定する視点と現在の実践に擬する視点との二重の視点から定位することになる。そして、近代的な社会においては、超越論的水準もまた個人に帰属するものであると了解されているがゆえに、そのような個人の〈主体性Ⅱ主観性〉にあつては、「第三者の審級」は、規範的な可能性（理想）として確保されるが、現実的には実現されていない抽象的に内面化されたものとなり、それによって自己は常に二重化されることになる。個人の〈主体性Ⅱ主観性〉の機制は、必然的に自己の二重化を伴い、解消されることがない。逆に言えば、解消することの不可能性（永続的な自己の二重化）自体をその要件としているのである。

このような〈主体性Ⅱ主観性〉は、亀井の論じた「政治」における「自我」の性格と合致する。亀井が主張していたのは、「党派」

会的懐疑の史的典型」としてユダが取り上げられているが、亀井は、「生けるユダ（シュエストフ論）」一・二（昭10・5、6『日本浪曼派』）においてユダを「自我」の典型として主題的に取りあげている。このエッセイで亀井は、「自我主義」について次のように述べている。すなわち、「自我主義とは何か。『体を凭せて休むだけの固い物』を拒否し、一切の法則や善や理想を拒否し、『歩いたもの』のない、歩かれぬ道』を敢へて歩まうとする非常の信念である。『中略』非常の信念は一の堅き決意であり、デーモンに憑かれたもの、無暴な夢、また天才の意識だ」。したがって、社会的激動期において、一切の依託物を拒否した自我（能動的主体）とは「非合理的存在」であるが、それは「既存の法則をもつて現実を測量するのではなく、汝自身の肉体をもつて現実を測量すべしといふ決意と行動の性質を指してゐる」のである。そして、「自我」に於ては、「結論ではなく、過程が、過程における戦ひの不可測性が最大問題なのだ。確実さに到達するといふことは彼の拒否するところである」という。

絳秀史は、「生けるユダ」における亀井の主張が「自己意識の覚醒」（「能動的主体の確立」）であつたとともに、裏切り者ユダにアイデンティファイすることに於て「転向の正当化のよりどころ」ともなつていったと指摘している。すなわち、「転向体験はあるレヴェルにおいては自己意識の覚醒——「能動的主体の確立」——をもたらずが、それは続いてその意図の放棄に必然的に帰結していく」ことになつたと駆け足に述べている。絳のいう「自己意識の覚醒」とは、近代的な個人の〈主体性Ⅱ主観性〉の構造の露呈であると把握し直せるであらう。ここでは大澤真幸の〈主体性Ⅱ主観性 subjectivity〉についての見解を本稿の文脈において必要な点で参照しておきたい。

の「指導的理論」が超越論的水準の「第三者の審級」の座を占拠している状態に対する批判であり、それに対して亀井のいう「能動的主体の自意識」とは、「指導的理論」を相対化し、抽象的な「理想」として内面化して確保した、二重化した意識のことであつたと言えよう。それゆえに、さしあたっては、「自我」とは、外在的なイデオロギーに従属した意識からの自由を得るもののである。しかしながら、それは同時に「理想」への憧憬の他に何も頼るべきものをもたず、「不安」「混迷」にさらされた「過程」に常にどまろうとするものとなるがゆえに、固定化する事態を回避することにもなる。それゆえ、「転向」という形になることを容認することにもなる。そして、無条件に従属すべき外在的な論理や体系的知を相対化し否定する働きとしての「自我」は、それゆえに新たな論理や知に依拠するわけにはいかなないのである。

四

翻つて、以上のような亀井の主張とも比較して島木の小説を見なおすならば、『癩』における岡田は、共産主義的理想を信じ非転向を貫く、太田のとるべき行為の規範を示す存在だつたという意味で「第三者の審級」の座を占めていたといえよう。この小説においては、外在的に現れた岡田を太田が「見る」という二者関係の〈距離〉が縮まることのないものとして形象化されていた。それに対して、『盲目』においては、「第三者の審級」は「見る」ことが不可能となつた古質に内面化されており、超越論的、内在的二つの水準が、ともに古質に帰属しているかのように形象化されていたといえよ

う。すなわち、終局においてあらわれる「一定の距離を置いて」自己を「見る」古賀の在り様とは、二つの水準が個人に帰属しているかのような事態に対応するといえる。したがって、「盲目」の古賀において近代的な「主体性」「主観性」は最も典型的な形で形象化されてきたと見做しうる。だが、「主体性」「主観性」は理想への到達の不可能性においてこそむしろ生動するものであるがゆえに、背理をも内包するものであった。「盲目」の視力^⑩の含意する、見えな目で見るといふ背理は、この不可能性に対応するといえよう。

亀井においては、積極的な意味で理想を憧憬するという契機があったのに対して、島木の小説では、全ての基盤となる肉体的条件の崩壊において盲目の闇に陥った者が、それでもなおかつ光を見出すという消極的なかたちであったという違いは見逃せない。だが、島木の小説『盲目』において形象化された「盲目」の視力^⑪は、亀井の「転形期の自我」が「自己意識の覚醒」(桂)であったのと同様に、自己意識^⑫近代的「主体性」「主観性」の覚醒の形象化であったと見做しうる。と同時に、それが亀井において転向の正当化へとつながったように、島木においても別な形ではあるが転向の論理化であったといえよう。周知のように、その後島木は、故郷へ帰って農事に従事する主人公を描いた『生活の探求』(昭12・10)、『続生活の探求』(昭13・6)を執筆するにいたって、本格的な転向を自覚するにいたった。島木においてこの軌跡は、「見る」ことには「離れた距離」を、大地に「触れ」る、故郷での「肉体的な労働」によって解消する方向へ向かったと捉えられるのではなからうか。

※ 島木健作の小説本文の引用は、国書刊行会版『島木健作全集』全十五巻を用い、『島木全集』と略記した。特に『癩』『盲目』からの引用は『島木全集』第一巻からで、引用箇所が付した()内の数字はこれの頁数である。また、本稿に引用した文中の傍線は、すべて引用者のものである。

注

- (1) 安藤宏『自己意識の昭和文学―現象としての「私」』(至文堂 一九九四・三)
- (2) 平野謙『昭和文学史』(筑摩書房 一九六三(昭三八)・一二) 186～188頁
- (3) 中村光夫「思想の盲点―文芸時評」(昭10・3『文学界』) ただし引用は『中村光夫全集』第五巻(筑摩書房)所収の「獄」と「黎明」による。
- (4) 三島由紀夫「解説」(『日本の文学』40 林房雄 武田麟太郎 島木健作)中央公論社 昭43・7)
- (5) 中村光夫前掲(3)
- (6) 三島由紀夫前掲(4)
- (7) W―J・オング『声の文化と文字の文化』(桜井直文/林正寛/糟谷啓介訳 藤原書店 一九九二・二〇) 153頁
- (8) W―J・オング前掲書(7) 153頁
- (9) 竹松良明「島木健作論―「癩」の構造」(『昭和文学研究』34 一九九七・二)

- (10) 小笠原克『島木健作』(明治書院 一九六五・一〇)
- (11) 小野寺凡「転向者と「私」」(『講座 昭和文学史 第二巻 混沌と模索』有精堂 一九八八・八)
- (12) 亀井勝一郎「諦観のつよさ」(発表誌不明/『転形期の文学』ナウカ社 昭9・9/講談社版『亀井勝一郎全集』第一巻)
- (13) 亀井勝一郎「島木健作の人と作品」(昭11・8『新潮』/講談社版『亀井勝一郎全集』第三巻)「最初のころのもの(「癩」や「盲目」と最近の作(「第一義の道」や「若い学者」)などを改めて通読してみた。近頃の氏は殆ど度し難い。やはり「盲目」が一番よく、氏を語る上に欠くべからざる作品であると思つた。」

- (14) 講談社版『亀井勝一郎全集』第一巻
- (15) 桂秀実「自己意識の覚醒―昭和文学の臨界」(『探偵のクリティック 昭和文学の臨界』思潮社 一九八八・七)
- (16) 桂秀実前掲(15) 14～15頁
- (17) 大澤真幸「主体性の変移と資本主義の精神」(『性愛と資本主義』青土社 一九九六・七)
- (18) 亀井の「自己意識の覚醒」が日本浪漫派への参加へとつながり、とくにロマン主義的傾向において転向していったように、島木にも、磯田光一(『比較転向論序説』勁草書房 一九六八・一二)が論じたように「ロマン主義的精神形態」を認めることができる。
- (19) 島木健作自身、「生活の探求」について(『改造社版』新日本文学全集第十九巻 島木健作集』(昭16・5改造社) 所載

／引用は『島木全集』第十三巻)で、「転向といふことが、単にある政治上の主義や、政治的な組織からの離脱といふやうなことではなくて、さらに深い人間の精神の問題であること、それは求道の過程そのものであること、その意味においてそれは一生の事であること、を、真に強く自覚したのは、『生活の探求』においてであった」(472頁)と述べている。

(20) 島木健作『生活の探求』(河出書房 昭12・10) 引用は『島木全集』第五巻(10頁)による。「彼は今痛切に肉体的な労働を欲してゐた。彼は、心身がある一つの対象に向つて統一された状態にあることを、張りきつた力の感じ、充実感と云つたやうなものを、深い自覚に於てといふよりは、ほとんど本能的な欲求として、渇くやうな気持で求めてゐたが、さういふ彼の求めに最も端的に応へてくれるものが肉体的な労働であらうといふことは肯ける。「中略」彼は自分の過去に決別しようとしてゐた。脱出の道のない、泥沼のやうな觀念の世界にはまり込んで、抜け道がないといふことのなかにかへつて陶酔してゐたやうな過去に別れやうとしてゐた。また、「日本への愛」(昭12・5『新潮』/『島木全集』第三巻)では、「二度と實際運動には関係しない」と誓約して出所し、農事問題へ専心することによって「現実的な日本」を志向する主人公が、結末部において、彼の志向する「現実的な日本」を、時流のつて主張される「抽象的な「日本」と区別して「裸の皮膚で触れて知る日本」と呼んでいる。